

## 地域は誰かの利他的精神でできている

館山 福原 一

私の最も好きなコマーシャルに、あるコーヒーの「世界は誰かの仕事でできている」というキャッチフレーズがある。これを私流に発展させると、利己的精神（主義）の対極にある「地域は誰かの利他的精神でできている」となる。

勤労の義務が記されている日本国憲法の三大義務を私は、永年指導していた剣道スポーツ少年団の小中学生に時々話した。

①勉強は自分の将来のためにだけやるものではありません。社会の役に立つ人間になるためにやらねばならないのですと、その理由を話した。

②仕事は、一生懸命やらねばなりません。どんな仕事でも、社会という歯車の一つであり、必ず役に立っています。誇りを持ってやりなさい。

③一生懸命働いて、税金をいっぱい払わなければ、社会は成り立ちません。

市民の中には、「市政が悪い、税金の使い道が悪い。だから私は、あえて市民税を払わない」と豪語している人がいます。その人が立ち上がって、市民や行政に訴えるならいざ知らず、そのような人は他人の税金でできた、道路や橋や公共施設を歩く権利はありません。原始人か仙人のように深山に隠れ、自給自足で、1人で住むべきですと子どもたちに話した。

このように国民の三大義務があるにもかかわらず、戦後は戦前の国民が抑圧されてきた自由と権利を主張しすぎ、国民として、地域人としての義務が、後回しにされてきたような気がする。

モンスターペアレントが、その極端な例であろう。自分の自由や権利を含む利己的な精神が真っ先にあり、国民としての義務や利他的精神の重要性を教育が力を入れてこなかったのか。道徳教育の時間が悪かったからなのか。日本社会の流れなのか。それとも日本人が馬鹿になってしまったのか。

権利を主張する前に、国民として地域人として、三大義務以外にも義務があり、それをまず果たすべきではないだろうか。

経済の社会に目を向けてみよう。ここ30年位前から安房の商業は、地元のスーパーが多店舗展開したり、大手資本のスーパー、量販店が数多く進出したりして、地元の小売店（食品、衣料から建材まで）の経営が圧迫され、そのため、数百の商店が廃業や事業の縮小に追い込まれた。

資本主義の社会では、事業でこれ以上儲けてはいけないということはない。いくら儲けてもよい。しかし、一方が多分に売り上げを伸ばせば、同じパイの中で仕事をしている他方は、売上げ並びに利益が激減し、廃業をもしなければならない。

ならば、スーパーや量販店は、たくさん利益を上げ、税金もたくさん払い、かつ資金的（寄付行為等）及び人的に社会貢献をしなければ、資本主義社会は成り立たない。私は、これは大きな利益を上げている企業や大手の義務でもあると考えている

10 年位前、この資本主義の当り前の論理を、「安房の海を守り育む会」の長老（当時 80 歳代）に話したところ、その考えは 1905 年、ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーが書いた論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に記されていると教えていただいた。

さらに長老は、この論文がマルクス主義、レーニン主義より先に世に出ていたら、この 2 つの主義は世に出なかったかもしれないとも話された。

この「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を調べてみると、キリスト教の中でもプロテスタントの多いアメリカやイギリスでは、国民に寄付文化が定着しているのが必然だと、理解できる。

日本では、2011 年の東日本大震災以降、一部の国民が寄付行為に目覚めたような気がするが、まだ文化としての定着には、ほど遠い次元だと思っている。

日本の上場企業などの大きな企業では、昭和 60 年代より、企業としての社会的責任に気付き、寄付行為を含む社会貢献活動を行う会社が増えてきている。

安房地方では、自治体の財政が苦しい中、企業も個人もなるべく多くの税金を払い、もしくは肉体的に社会貢献活動を行ない、地域人としての自覚と責任を果たさなければ地域は衰退してしまうと思っている。ちなみに私の経営している酒店も昔のように税金を払えないので、せめて肉体的に奉仕しようと考えている。残念。

17 年前に設立された「安房の海を守り育む会」の設立趣意書の一部にこう書かれている。

「地方自治体による行政機能のみに依存するのではなく、この地域で生活する我々自身が、地域に対し自らの主体性と責任を自覚することが必要となる。安房の海を守り育む会は、こうした住民自治意識の確立を意図し、海を核とした安房地域の発展を願い設立する」

これは、利他的精神のひとつであると言うよりも、三方を海に囲まれた安房地域は古代より現在まで海の恩恵を受けて生活し、かつこの地方を発展させて頂いた海に対する仁義であり、海を守るのは今を生きる私たちの義務だと思っている。

当会は 17 年前から通年土、日の活動（無報酬）を行ない、有用微生物群 EM を館山市内の 3 河川と排水路を通じて、培養した活性液を館山湾に毎週 5000 ㍓を放流している。

当会ができた 18 年前までは、四半世紀以上にわたり、館山湾の北条海岸や那古船形海岸の遠浅の海は、ぬるぬるの所、ぶかぶかの所、ある時は全面に黄色い粉のようなものが覆っており、サラサラしている砂地は無かった（市議の長老の方もご存じ）。遠浅の海には、貝もカニも、生物は見かけず、海は死んでいた。

それが有用微生物群 EM を放流して、3 年で那古船形の海はサラサラの海を取り戻し、県の絶滅危惧種「ナミノコ貝」が 30 年ぶりに復活した（九州の一部では魚屋さんで販売している）。EM を放流し始めたころの県立中央博物館の副館長（海洋学博士）は、私にこう言った。

「私は館山湾に時々来ているが、ナミノコ貝は復活しないでしょう。EM を使ったのは、早とちりですね」と。湾と川のあまりの汚染を思い、同時に EM の効果を全く認めていなか

った。

しかし、ナミノコ貝は復活した。私はそれが復活した時、よくぞよみがえってくれたとうれし涙を流した。

私は中学時代、科学部にいて将来、科学者になりたいと思っていたほど科学が好きだった。だからEMの文献や復活事例を読あさっていたので、効果は確信していたが、まさか3年で復活するとは思っていなかった。

あれからさまざまな貝やカニが復活した。アサリ、ハマグリ、4年前には約40年ぶりにマテガイまで復活している。

有用微生物群EMは約40年前に、国立琉球大学比嘉照夫教授が開発したもので、私たちが日常食用し、恩恵を受けている乳酸菌群、酵母菌群、光合成菌群など5群の菌類約80種の人体や地球に有用な微生物の集合体である（EM菌という菌は存在しない）。現在、世界の120か国以上で活用されている日本発の技術である。

有用微生物群は、日本でも何種類も開発製造されている。例えば愛媛県工業試験場が「えひめアイ」の名で開発製造し、河川と海の浄化に活用しているのを約10年前、NHK第一ラジオの特集番組で放送されたのを私は聴いている。

川や海を浄化しているのは微生物である。微生物が有機物を分解（低分子化）して、その効果で食物連鎖が好循環し、さまざまな生物が復活する。しかし、私たちが使用している化学物質（合成洗剤、除菌剤、漂白剤等々）により微生物は死んでしまう。

私たちは、いなくなってしまった川や海に、その微生物を足している活動をしている。ゆえに私たちが化学物質を使用している限り、残念ながらこの活動は続けなければならない。

人間は利便性という欲望のもと、企業も私たち個人も、生きていだけで地球本体並びに生物に迷惑をかけている。だから、当会の活動は利他的精神の活動というよりも自己責任活動と言える。

この活動には、毎年200万円以上の資金が必要であり、そのうち85%が館山市民、南房総市民や、遠くは東京都民（館山市出身ではない）の心温かい寄付金なのである。誠にありがたく、この紙面をお借りして伏して御礼を申し上げる次第であります。

#### 【館山の歴史に残る利他的精神の体現者】

当会は前述したように、活動し結果を残してきた。各地域には、多種多様な数えきれないほどの社会貢献活動をしている人々がいる。そのほとんどが団体に所属し活動しているが、中には個人で行っている人もたくさんいる。

館山の歴史に残るであろう体現者は、那古の高橋節義さんと正木の山田建夫さん（当会役員、ともに74歳）は、その協力者である。2人は当会の活動を平日でも、ある時は1人で、ある時は2人で黙々とやり、パワーとスタミナが並はずれている高橋さんを、私は数年前より鉄人と呼んでいた。

3年前、この2人は正木の遠藤順子さんの協力を得て、那古山の頂上の展望台前にある急斜面に数千株の彼岸花を植えた。球根は西岬のものと、一部は飯島政義さんから贈呈され、

肥料袋8袋分もあった。2人は那古の中田晃一さんの協力を得て頂上に運んだ。

高橋さんは頂上まで、あの急階段を10回以上も登ったという。頂上の急斜面には雑木や竹が生い茂っていたので、その伐採も2人で3日かかった。この作業を完了させた高橋さんは、過労のため、貧血を起こして通院し注射を打った。高橋さんと山田さんは、無償である当会の活動をけがや病気で体調不良であっても、やろうとするので「やめてください、お願いします」と言ったことが何回もある。

何も病気になるほど、やらなくても良いと思うのだが、昔から2人の辞書には「限度」という言葉が無いのを、私は承知していた。身を粉にして働くというのはこの2人のような人のことをいうのだと思う。

私たちは、その努力のたまものを見ようと10人で花見を行った。本年9月23日、日曜で秋分の日、久しぶりの晴天だった。私は日曜日の活動に、皆が来る前、活動している第一倉庫の前に「那古山山頂の彼岸花を見る会参加者募集」と手書きのポスターを張って置き、持ち物を3つ書いた。

- ①弁当、飲物（アルコール可）
- ②高橋さんと山田さんに対する感謝の心
- ③海と山を恋する心（愛ではなく恋と書いた）

毎週活動に来ている80歳代の川名進先輩も一緒だった。急な階段を山頂まで、ゆっくりと登った。山頂に着くと、館山湾が一望できる見晴台の前の急斜面に、みごとな彼岸花が満開だった。皆感激して、口々に「素晴らしい」と叫んだ。私たちは2時間以上話にも花を咲かせ、ゆっくりと階段を下り帰路についた。

那古山に関してはもう1人、利他的精神を発揮した人を紹介したい。那古山には、昔から4つの登山道があったが、私の家の裏から登る道は、約40年位前から木が繁り登れなくなっていた。それを3年前、那古の柔道家上木保男さんが1人で2年間かけて、伐採を行い登れるように整備してくれた。

急斜面には、登りやすいようにロープを張ってくれた。その後、那古では古道野会が結成され、登山道やその周辺の整備を行っている。上木さんは会長として活躍され市民に喜ばれている。

当会では、来年の彼岸花の花見は、この上木さんがつくってくれた登山道を登ることを決めている。

安房の地域でも、このように人々を楽しませようとか、安心安全でけがをしないようにしてあげようとか、便利にしてあげようとか、さまざまな活動を人知れず行っている人がたくさんいるであろう。

市民一人一人が利他的精神を発揮し、一人一役の多種多様な社会貢献活動を行えば、財政難、少子高齢化の進む安房地域はもっと住みやすく素晴らしいまちになると確信している。今、多くの市民の皆様が奮起し立ち上がって下さることを期待している。

さて、最後に当会の話に戻る。私は50歳の時、人生を楽しくする方法は、これだと気付

いた。

それは人、物、地球、海、山、風、太陽などの万物に感謝する心が自分に備わる事と、すばらしい友人に恵まれる事だと思った。私は、半世紀前の公務員時代の友人、当会の活動をしている友人、その他素晴らしい友人に恵まれ、色々な事を学ばせて頂いている。人生は楽しくてしょうがない。

当会では、那古船形の第一、第二倉庫に 10 人余り、下真倉の第三倉庫に同じく 10 人余りで毎週週末に活動している。60 歳代から 80 歳代（2 人）まで高齢だが、毎回大声で笑うほど楽しい。素晴らしい仲間だ。

単純な軽作業で、男女年齢不問の一時間半位の作業。ぜひ若い人も中高年の人も、見学に来てみてください。館山の海を日本一にしようと本気で思って活動しています。感謝。

連絡先は 0 4 7 0 - 2 0 - 5 0 2 2 NPO 法人安房の海を守り育む会事務局